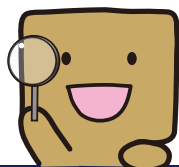
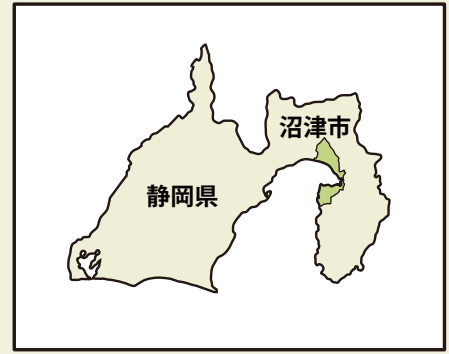


もっと知りたいぬまづのこと

| | | |
|---|---|---|
| ぬ | ま | づ |
| の | 史 | 跡 |
| ガ | イ | ド |
| ブ | ツ | ク |





詳細地図は各史跡のページに掲載

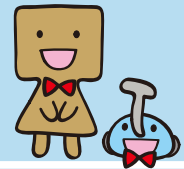
- 1 興国寺城跡
- 2 長塚古墳
- 3 高尾山古墳
- 4 江浦横穴群
- 5 長浜城跡
- 6 井田松江古墳群
- 7 洋式帆船建造地跡

はじめに

沼津市には、約 37,000 年前の旧石器時代から人々が生活し続けています。このため、市内には遺跡が 400 箇所以上も登録され、さらにはこうした遺跡の中でとりわけ重要な遺跡を「史跡」として指定しています。令和 2 年時点で国指定 3 件、県指定 5 件、市指定 7 件の合計 15 件が史跡となっています。

このガイドブックでは、史跡として指定されているもののうち古墳や城郭などの 6 件と国史跡指定を目指す高尾山古墳を紹介します。これらはいずれも築造された当時の形が残っていたり、復元されたりして歴史を体感できる史跡です。

ぜひとも現地を訪れて、沼津の歴史を感じてみてください。



もくじ

- 1 興国寺城跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 2 長塚古墳・・ 3
- 3 高尾山古墳・・ 5
- 4 江浦横穴群・・ 7
- 5 長浜城跡・・ 9
- 6 井田松江古墳群・・ 11
- 7 洋式帆船建造地跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

市内史跡一覧

★…本書に掲載

| | 名称 | 時代 | 所在 | | 名称 | 時代 | 所在 |
|-----|--------------------------------|-----|---------|-----|------------|-------|-----|
| 国指定 | 休場遺跡 | 旧石器 | 宮本字元野 | 市指定 | 神明塚古墳 | 古墳 | 松長 |
| | ★長浜城跡 | 戦国 | 内浦長浜・重須 | | 子ノ神古墳 | 古墳 | 西沢田 |
| | ★興国寺城跡 | 戦国 | 根古屋 | | 日吉廃寺塔址及び礎石 | 白鳳～平安 | 大岡 |
| 県指定 | 白隠禅師墓 | 江戸 | 原東町 | | 霊山寺変形宝篋印塔 | 鎌倉 | 本郷町 |
| | ★江浦横穴群 | 古墳 | 江浦 | | 霊山寺五輪塔 | 鎌倉 | 本郷町 |
| | ★洋式帆船建造地跡及び ブチャーチン宿所附関係遺品一括 | 江戸 | 戸田 | | 伝阿野全成・時元墓 | 鎌倉 | 井出 |
| | ★井田松江古墳群 | 古墳 | 井田 | | 日露交渉地跡大行寺 | 江戸 | 戸田 |
| | ★長塚古墳 | 古墳 | 東沢田 | | | | |

例言

1. 本書は、沼津市内に所在する史跡の案内ガイドブックとして作成しました。
2. 本書は、沼津市教育委員会事務局文化振興課主任学芸員の木村聡と同課会計年度任用職員の神山香織が編集・執筆しました。
3. 本書に掲載した史跡 1～5 の出土遺物は沼津市文化財センターに、6 の出土遺物及び 7 の関連資料は戸田造船郷土資料博物館に所蔵されています。

東国における

戦国時代の幕明け



興国寺城跡全景（平成 28 年度撮影）

1 興国寺城跡

国指定史跡

所在地 沼津市根古屋
 文化財の種類 城郭
 年代 戦国時代（江戸時代初期）15世紀後半～慶長12年（1607）
 主な出土遺物 かわらけ、国産陶器、貿易陶磁器
 交通アクセス JR東海道線「原駅」から富士急行バス「東根古屋」下車。



さらに詳しい説明はこちら



興国寺城跡ガイドブック



伝天守台石垣

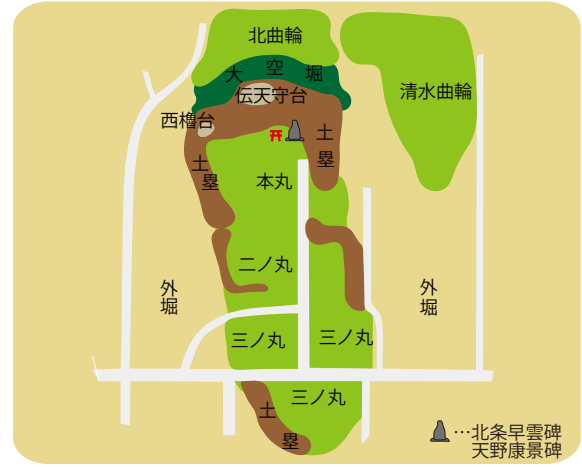


本丸大土塁

興国寺城跡は、沼津市根古屋に所在する戦国時代の城郭です。現在、本丸の大土塁が良好に残り、城で最も標高の高い伝天守台には石垣や二棟の礎石建物跡を見ることができます。さらに、伝天守台の背後にある巨大な大空堀は壮観で最大の見どころとなっています。

城の歴史の始まりは長享元年(1487)、駿河国を治める今川氏の家督継承争いで功のあった伊勢新九郎盛時(伊勢宗瑞・北条早雲)が今川氏より興国寺城を与えられたことに始まります。ここを旗揚げの地として、盛時は現在の伊豆の国市にある堀越御所へ攻め入り、戦国大名への道を歩み始めました。

ただし、盛時の旗揚げについては江戸時代に書かれた「今川家譜」などにしか記されていないため、史実か疑う説もあります。では最も古い興国寺城の史料はというと、天文18年(1549)の今川義元の文書です。これには富士川以東の安定のために、義元が興国寺という寺を移転させ、そこに城を整備したと書かれています。このことから盛時の興国寺城は寺を転用したもので、義元の普請によって本格的な城郭に造り変わったと考えられます。以後、興国寺城はこの地域を治め



興国寺城跡曲輪配置図



大空堀

る重要拠点となりました。

今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれると、駿河国のバランスは崩れ、永禄11年(1568)、武田信玄が駿河国に侵攻を開始します。北条氏も今川氏を支援する名目で東駿河に出兵し、興国寺城などを確保しました。この時、堀和氏統という武将が興国寺城主に任ぜられて、武田軍と戦ったとする記録が残されています。氏統はよく戦って城を守りきったようですが、後に武田氏と北条氏は和議を結び、興国寺城は武田方に引き渡されました。

武田軍による興国寺城支配は天正10年(1582)の武田氏滅亡まで続き、滅亡後は徳川家康家臣の牧野康成・松平清宗・家清親子が城主となりました。そして天正18年(1590)北条氏滅亡後、徳川氏は江戸へ転封され、代わって豊臣氏家臣中村一氏が駿府城に、そしてその重臣である河毛重次が興国寺城の城主となりました。関ヶ原の戦い以後は、再度徳川氏の城となり、慶長6年(1601)から天野康景が城主となりますが、慶長12年(1607)家臣の起こした事件をかばって城からいなくなってしまう、城主不在で興国寺城は廃城となってしまいました。

2

ながつかこふん 長塚古墳

県指定史跡



長塚古墳全景（南より）

はにわ 埴輪がめぐる大いなる塚

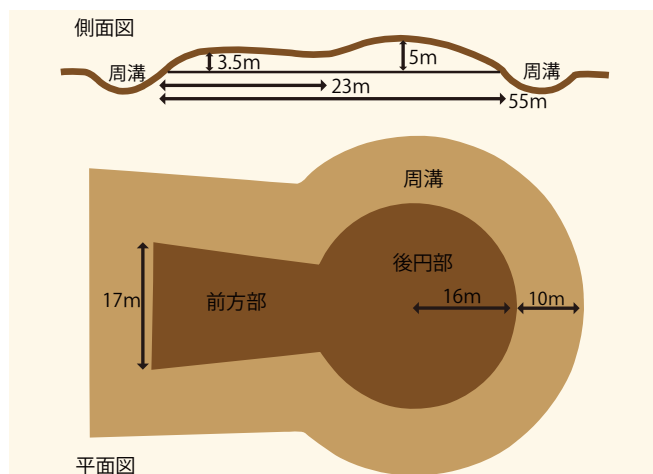
所在地 沼津市東沢田
 文化財の種類 古墳
 年代 古墳時代後期前葉（6世紀前半）
 主な出土遺物 円筒埴輪、朝顔形埴輪、須恵器、土師器
 交通アクセス JR東海道線「沼津駅」北口から富士急行バス「高砂町下」下車徒歩約5分。



長塚古墳は、沼津市東沢田に所在する古墳時代後期前葉（6世紀前半）に造られた前方後円墳^{ぜんぽうこうえんぶん}です。墳丘の長さは54m、周溝を加えると75m前後です。埋葬施設は盗掘により破壊されていましたが、板状の石が多数発見されたため、石を組み合わせた箱型石棺であったと推定されています。出土遺物には、後円部で埴輪列が確認されています。古墳といえば埴輪とイメージする人も多いかと思いますが、市内で埴輪が出土するのは長塚古墳が唯一です。埴輪の他には灰色の須恵器^{すえき}や茶色の土師器^{はじき}と呼ばれる土器類が周溝からまとまって出土しました。

長塚古墳は、復元整備はなされていないものの、市内に残る3基の前方後円墳（長塚古墳、神明塚古墳（松長・市指定史跡）、子の神古墳（西沢田・市指定史跡））の中では最も形が綺麗に残っていることから、前方後円墳の形を理解するには最適です。

発掘調査は、沼津市誌編纂事業^{へんさん}に合わせて、昭和31年に明治大学の後藤守一教授^{しゅいち}を団長とする調査団によって行われました。後藤教授は、沼津中学（現・静岡県立沼津東高等学校）出身であり、発掘調査を担当する際には「自分が専門と努めてきた研究の分野で故郷の地に尽くす事のできるの、かねてからの私の念願」と報告書に綴っています。調査に先立って実施された移霊式^{くわいれ}、鍬入式には、調査団員だけではなく、当時の市長や教育長、多くの市の職員、市議員も参加するものであり、沼津市がこの古墳の発掘調査に大きな期待を寄せていたことがわかります。この調査では埋葬施設は攪乱^{かくらん}を受けて検出されませんでした。古墳をめぐる周溝の形態が詳細



概略図



長塚古墳全景（昭和31年撮影）

に追求されるなど、当時としては数少ない古墳の構造に目を向けた調査が行われたことは特筆に値します。そして調査の翌年、『長塚古墳発掘調査報告書』が沼津市文化財調査報告第1集として刊行されました。沼津市行政による文化財調査は、この古墳に始まったといっても過言ではありません。



えんとう
円筒埴輪

朝顔形円筒埴輪



長塚古墳出土土器

3

高尾山古墳

たかおさんこぶん



高尾山古墳全景（南東より）

スルガ最初の王ここに眠る



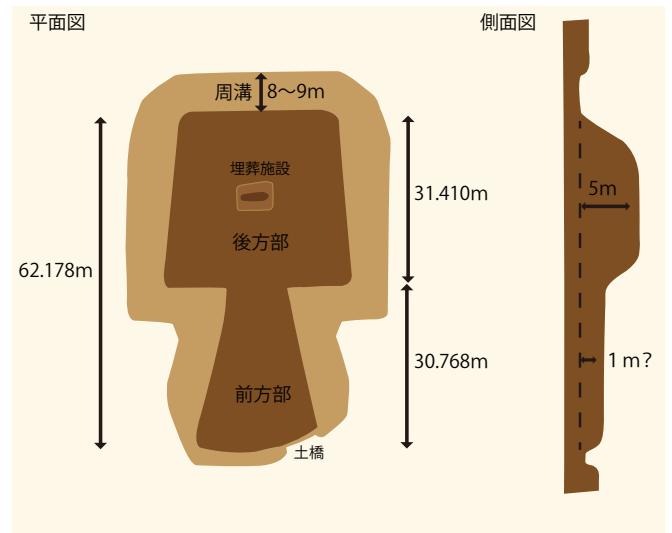
所在地 沼津市東熊堂
 文化財の種類 古墳
 年代 古墳時代初期（3世紀半ば頃）
 主な出土遺物 青銅鏡、勾玉、鉈、槍、鉄鏃、土師器
 交通アクセス JR東海道線「沼津駅」北口から富士急行バス「明治史料館前」下車徒歩約5分。



高尾山古墳は、沼津市東熊堂^{ひがしくまんどう}に所在する東日本最古級の前方後方墳です。道路建設に伴う発掘調査で未盗掘の状態で見つかりました。埋葬施設から出土した遺物から3世紀半ば頃に被葬者が埋葬されたと考えられます。この年代は『三国志^{ぎしよ} 魏書^{ぎしよ} 烏丸鮮卑東夷伝^{うがんせんびとういでん} 倭人条^{わじんじょう}（いわゆる魏志倭人伝）』で有名な「卑弥呼」「邪馬台国」と同じ年代です。高尾山古墳に葬られた人物は、スルガの最初の王といっても良いでしょう。

墳丘の全長は約62m、周溝の幅は後方部で8～9m、前方部の南端では約2mを測り、墳丘の高さは後方部で約5mあります。古墳時代初期のものとしては東日本で最大級の古墳です。

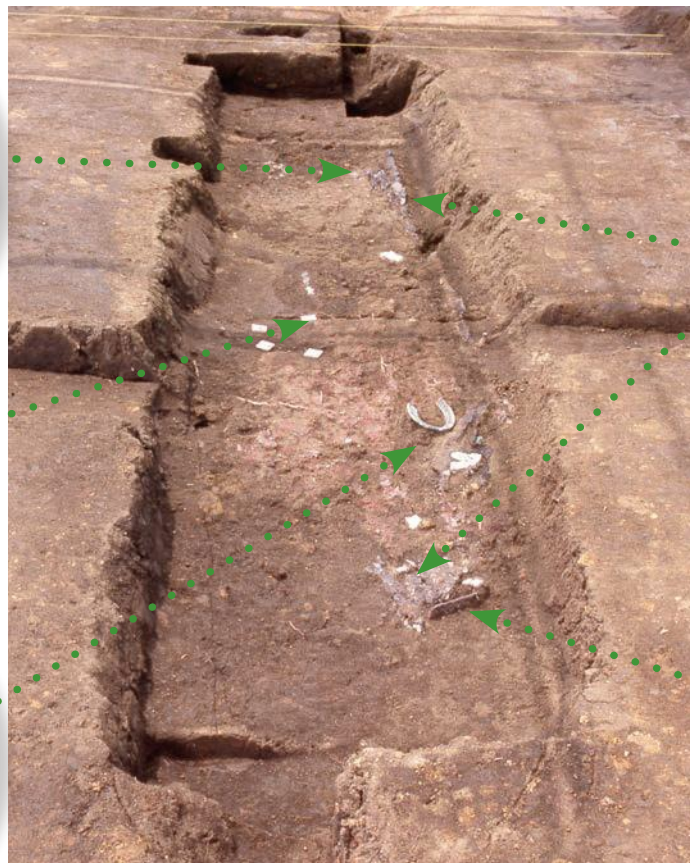
遺体は酸性の土壌に溶かされてしまい見つかりませんが、出土状況から遺体は船の形をした木棺におさめられ、墳丘に構築された墓坑^{ぼこう}中に埋葬されたと考えられます。そして埋葬施設からは、青銅鏡、勾玉^{かりがんな}のほか、槍・鉄鏃などの鉄製の武器を中心とした副葬品が出土しました。また、当時貴重であった水銀朱も大量に見つかりました。水銀朱は中国の神仙思想^{しんせん}において不老不死の薬とされるもので、日本でも古墳の埋葬施設に塗布される例がいくつか報告されています。



平面形復元図

埋葬施設以外では墳丘上や周溝から多量の土器が見つかりました。地元で作られた土器のほか、北陸や近江（現滋賀県）、東海西部、関東などからもたらされた、もしくはその系譜を含む土器も出土しており、こうした地域との交流が伺えます。

現在、高尾山古墳は保存整備事業を実施中であり、発掘調査の原因となった道路との両立を図る取り組みが進められています。出土遺物のレプリカを古墳近隣の明治史料館入り口ロビーにて展示していますので、古墳と合わせてご見学ください。



スルガの王が葬られた主体部と副葬品

4

えのうらおうけつぐん 江浦横穴群

県指定史跡



江浦横穴群 (A地区 南より)

石と海と生きた人々



所在地 沼津市江浦
文化財の種類 横穴
年代 古墳時代終末期～白鳳時代（7世紀末～8世紀前半）
主な出土遺物 須恵器、土師器
交通アクセス JR東海道線「沼津駅」北口から伊豆箱根バス「東江の浦」下車徒歩約10分。

江浦横穴群は、沼津市江浦にある岩山の斜面に横穴を掘り込んで造られたお墓です。年代としては古墳時代終末期から白鳳時代にかけて造られました。同じ頃、愛鷹山の中には石を積んで遺体を横から入れる横穴式石室という埋葬施設をもった古墳が多数造られましたが、江浦周辺の墓は石を積むのではなく、直接岩盤を掘り込むものでした。

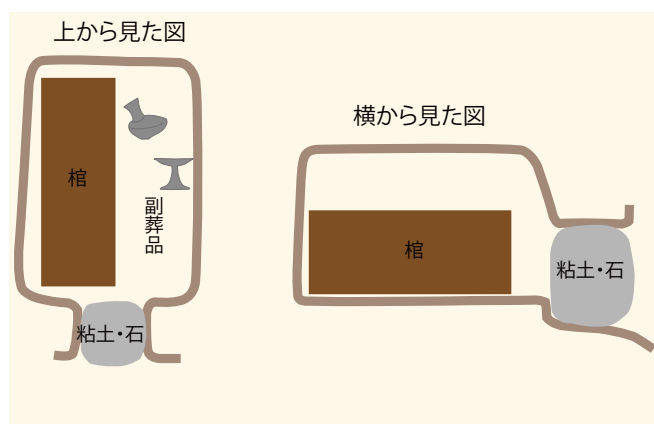
江浦周辺では江浦横穴群のほか多比横穴群、海豚洞横穴群、三津横穴群が分布していますが、江浦横穴群の横穴の数はAからDの地区で計92基確認されており、基数において江浦横穴群が他を圧倒しています。

横穴の大きさは、開口部が0.5～1m前後、奥行が1～3m前後で、壁面にはノミ状の工具で基盤である凝灰岩を削った痕が確認できます。横穴の形は長方形のものと奥にバチ型に開く2種類のものが確認されています。本来横穴には遺体を埋葬する玄室とその前に外部とを結ぶ通路である羨道が備わりますが、江浦横穴群の多くは羨道が退化してほとんどが、玄室のみとなっています。

江浦横穴群の調査は昭和22年に沼津東高校郷土研究部による踏査などで遺物が採取されてきましたが、発掘調査は行われていません。今、江浦横穴群の資料として残されているものは、こうした踏査の際に得られたもので、詳細は不明ですが、江浦横穴群の資料として伝わるものには須恵器の高坏、平瓶、蓋坏、土師器の坏などがあります。遺物の年代は6世紀末から8世紀初頭と様々ですが、羨道が退化して横穴が玄室のみの形態になるのは、8世紀代になって増加することが近隣の横穴群の調査か

ら知られており、このことから江浦横穴群も7世紀末ごろから8世紀前半の時期と考えるのが妥当と判断されます。

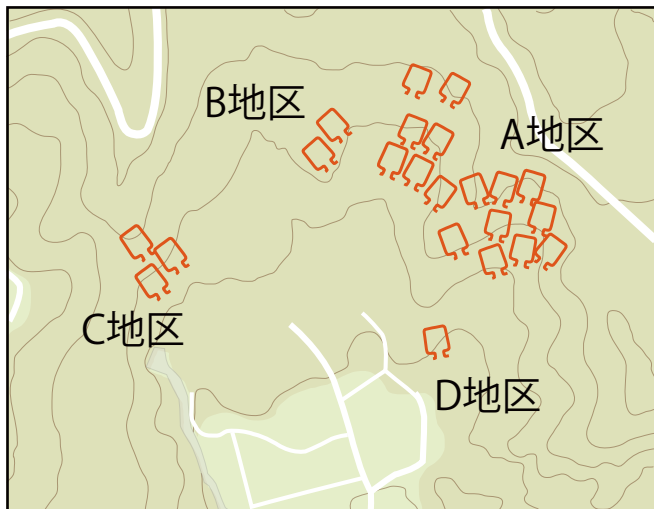
江浦横穴群に埋葬された人々が、誰であるのかわかっていません。ですが、江浦地区には大きな平野がないことから、海での仕事を生業としていた集団の墓ではないかと考えられます。そのためか江浦横穴群のB地区を除いて、多くの横穴は海に向かって開口しています。皆さんも現地に行ってどのような人々が岩盤を掘りこみ、墓としたのか考えてみてはいかがでしょうか。



模式図



横穴内部



江浦横穴群全体図（主要横穴のみ掲載）



江浦横穴群出土土器

5

ながはま 長浜城跡

ながはま
まじょう
あと

国指定史跡



長浜城跡全景（東から）

沼津の海に集結した

つわものたち



あたけぶね
安宅船

所在地 沼津市内浦長浜・重須
文化財の種類 城郭
年代 戦国時代（15世紀後半～天正18年（1590））
主な出土遺物 かわらけ、国産陶器、貿易陶磁器
交通アクセス JR東海道線「沼津駅」南口から東海バス「長浜城跡」下車。

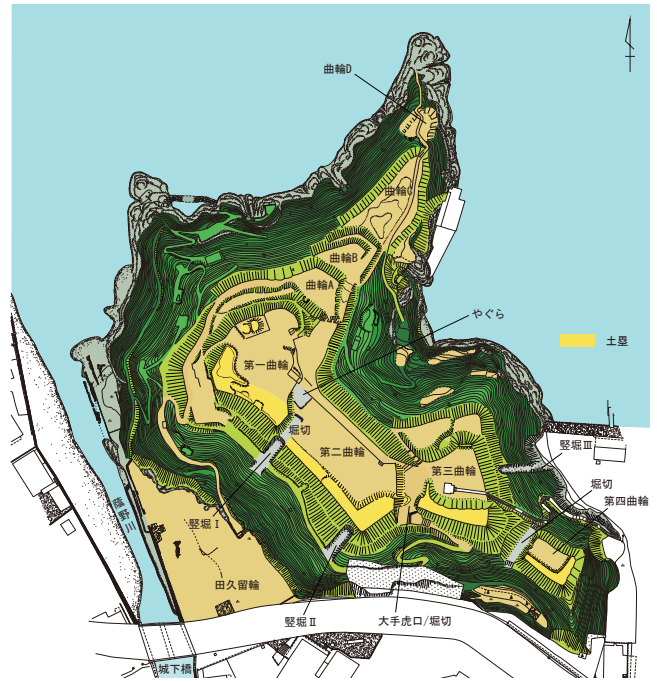


長浜城跡は、沼津市内浦長浜・重須^{おもす}の両地区にまたがる細長く突出した小丘陵を利用して築かれた戦国時代の城郭です。昭和63年に国史跡となってから、長年に渡る発掘調査と整備を経て、沼津市初の史跡公園として平成27年に開園しました。

城の構造は岩盤の丘陵上を階段式に削平して曲輪^{まがわ}（城の平坦面）が造られています。当時の絵図などが残されていないため、戦国時代にどう呼ばれていたのかわかりませんが、便宜上一番高いところを第一曲輪とし、以下南東に向けて第二曲輪、第三曲輪、第四曲輪が、北東に向けて曲輪A～Dが配されています。またそれに付属する小曲輪群や各曲輪を分ける堀切もあり、曲輪を守る土塁（土の壁）は曲輪の周囲を全周しないで陸側にのみ造られていて、海側の視界は開けるような構成になっています。

発掘調査の結果、城は15世紀後半から使用されていたことが判明していますが、この城が文献史料に現れるのは、北条氏と武田氏の関係が悪化した天正7年(1579)のことです。北条氏の命によって、武田氏に対する西伊豆防御のため、地元土豪^{どごう}によって使われていた城に新しく船着き場が造られ、水軍基地へ改修されました。さらに城には北条水軍の大将である梶原景宗^{かげむね}が派遣されるとともに、当時の最先端軍船である安宅船^{あたけぶね}も配備されました。そして天正8年(1580)には武田水軍と長浜城から出陣した北条水軍が重須沖・千本浜沖で戦ったと伝わります。後世に「駿河湾海戦」「千本沖海戦」とよばれる戦いです。両軍ともに自軍が優勢であったと伝えることから、戦いは一進一退であったと考えられます。

それから10年後、天正18年(1590)にも西伊豆に脅威が訪れます。豊臣秀吉の小田原攻めです。このときには豊臣水軍は伊豆半島を回り込んで、直



長浜城跡曲輪配置図

接小田原へ進軍したため、長浜城が大きな戦いの場とはなりませんでしたが、伊豆の拠点である韮山城を守る城として地元長浜の大川氏^{おがわじょう}へ籠城を命じました。最終的には北条氏は豊臣方に降伏したため、長浜城も戦後に廃城となったと思われます。

城の頂上までは約5分で登れ、ここからはかつて梶原が見た駿河湾ごしの富士山も見るができます。現在、城の裾はヨット停泊地ですが、これを軍船と見立てて景色を眺めてみてください。



長浜城北条水軍まつり



第二曲輪



安宅船平面表示（重須広場）

海人たちの眠る丘



井田松江古墳群全景（煌めきの丘より）

6 井田松江古墳群

県指定史跡



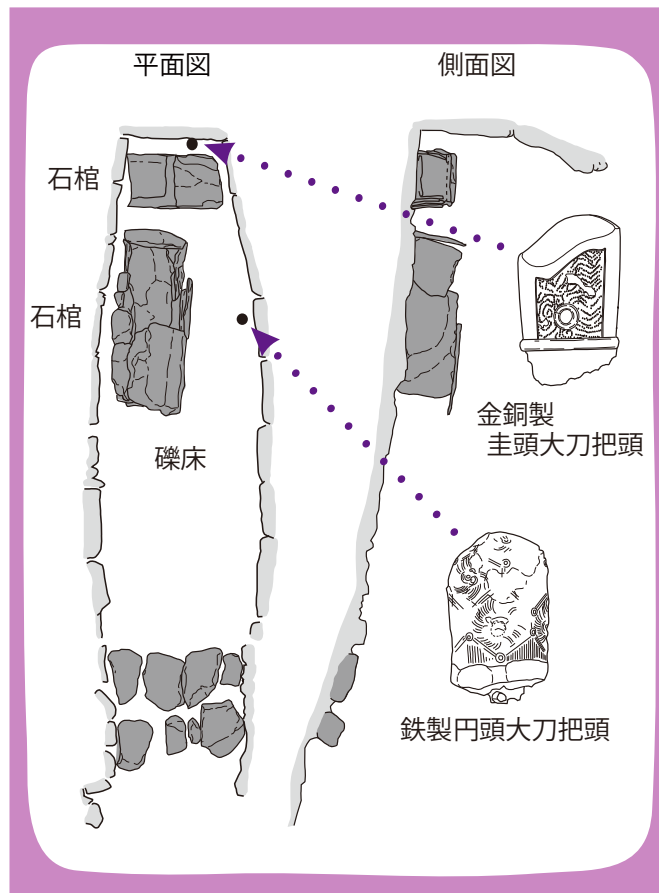
所在地 沼津市井田
 文化財の種類 古墳
 年代 古墳時代後期（6世紀末～7世紀後半）
 主な出土遺物 鉄製円頭大刀把頭、金銅製圭頭大刀把頭、玉類
 交通アクセス 東名高速道路「沼津IC」より車で約1時間30分。



井田松江古墳群は、古墳時代後期(6世紀末～7世紀後半)に造られた直径10m前後の円墳からなる群集墳です。秋山富南の『^{えんぶん}豆州誌稿』(寛政12年・1800年)に「井田洲郷ノ近所二冢多シ曾テ石槨刀属鎌ナト堀出セリ」と記録され、古くからその存在が知られていました。駿河湾を見下ろす標高50m以上の丘陵にあり、20基以上の円墳が確認されています。

これまでに、整備のための調査も含めて4基の古墳が発掘調査されています。7号墳は墳丘が直径約12mの円墳で、^{よこあなしきせきしつ}横穴式石室から^{きんかん}金環、丸玉、管玉、棗玉、切子玉、ガラス製小玉、鉄鎌、馬具、須恵器が出土しました。18号墳は、長径約13m、短径約10mのやや楕円形をした円墳で、奥行約8m、最大幅1.5mの大きな横穴石室内部に大小2基の組み合せ式石棺が安置されていました。出土した副葬品は銅釧などの装身具、金環、水晶製切子玉、ガラス製小玉、鉄製の武器(直刀・刀子・鉄鎌)が出土しています。中でも鉄製円頭大刀把頭は銀象嵌が細工されています。伊豆半島の中でも早い時期に横穴式石室を導入していることや、貴重な装飾付大刀が副葬されていること、海を見通す立地に古墳を築造することなどから、海上交通によって他地域との直接的な交流をもった集団が築造したものと考えられます。

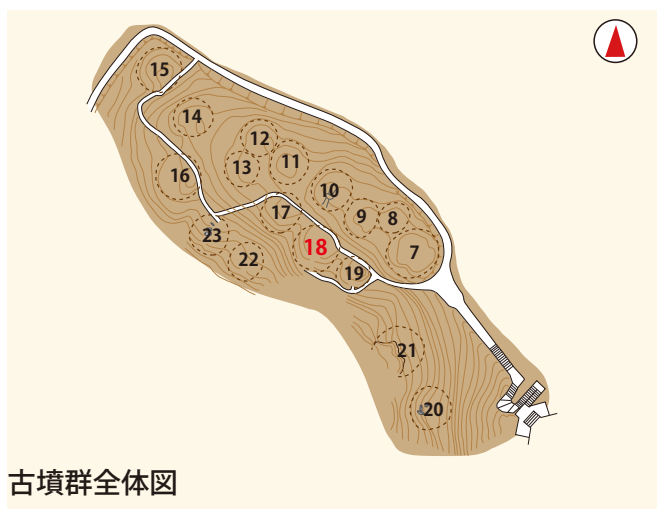
古墳群は復元整備が行われ、煌めきの丘から歩いて見学することが可能です。特に18号墳は発掘当時の横穴式石室と石棺を見学することが出来ます。密集する古墳群や煌めきの丘から駿河湾を見通して、ここで暮らした海人に思いをはせてはいかがでしょうか。



18号墳模式図



古墳群出土遺物



古墳群全体図

※ 1～6号墳は消滅



18号墳石室

7

洋式帆船建造地跡



戸田港（出逢い岬より）

技術が言葉の壁を越える



大工道具（近代化産業遺産）

県指定史跡



所在地 沼津市戸田
 文化財の種類 建造地（建造碑）
 年代 安政2年（1855）
 交通アクセス 伊豆箱根鉄道「修善寺駅」から
 東海バス「戸田」下車徒歩約10分。

洋式帆船建造地は、沼津市戸田に所在し、現在は記念碑が建っています。嘉永7年(1854)11月(旧暦)、安政東海地震が発生しました。この時、日露和親条約締結のため下田を訪れていたプチャーチン提督一行の乗ってきたロシア船ディアナ号が津波に襲われ破損、その後船の修理のため戸田港へ向かう途中、強風のためそのまま田子の浦まで流され沈没してしまいました。

船を失ったプチャーチンは帰国するために幕府に小型の代艦の建造を要請しました。幕府はこれを受け入れ、建造取締役として造船術の見識の高い蕪山代官の江川太郎左衛門英龍(坦庵)を任命、建造場所を戸田村と定めます。こうして日本初の洋式帆船の建造は戸田村で行われることとなったのです。

戸田村には約500人のロシア人が滞在し、日本人の船大工らと共に新造船の建造が始まりました。当時日本で許されていた欧米の言語がオランダ語のみであったため、会話はオランダ語の通訳を介して行われ、日本の造船技術者たちも言葉の壁を乗り越えて西洋式の造船術を身に着けました。

設計から約100日後、船は完成し、安政2年(1855)3月10日に進水式が行われました。ディアナ号と比べれば小さな船でしたが、プチャーチンは

戸田の人々へ感謝し、この新造船に「ヘダ号」と名付けました。そして3月22日にはヘダ号は戸田港を出港して帰国の途につきました。

その後、幕府は洋式帆船の優秀性を認め、同型船10隻の建造を命じ、うち6隻を戸田で建造させています。この船は郡名をとって「君沢型」と呼ばれ、ほぼ全て日本人の船大工の手によって造られました。また日本各地でも同型船が造られることになり、戸田村で技術を得た人々が長崎などに派遣されています。

こうして戸田村は西洋型造船技術を知る貴重な土地となり、日本の造船業の発展に貢献しました。そして、ヘダ号の建造地跡に大正12年(1923)3月10日、村長高田四郎左衛門以下村会議員などにより記念碑が建立されました。その後、ここは県指定史跡となり、安政東海地震という天災を乗り越え、日本とロシアとの絆を作った場所として永久に保存されることになったのです。



プチャーチン提督肖像



ヘダ号進水式の図



ディアナ号模型



ヘダ号模型



沼津市文化振興課公式FB

もっと知りたいぬまづのこと

ぬまづの史跡ガイドブック

発行 令和2年12月25日

編集 沼津市教育委員会

TEL 055-935-5010